

第 10 回 円山川流域委員会 議事録(概要版)

会議の概要

日 時： 平成 16 年 6 月 30 日(水)13 時 00 分から 16 時 00 分
場 所： 豊岡市民会館 4F 大会議室(豊岡市)

1. 開会及び委員長挨拶

庶務担当の(株)東京建設コンサルタントが議事進行を行った。

円山川流域委員会委員長藤田裕一郎(岐阜大学流域圏科学研究センター教授)が挨拶を行った。

2. 報告

庶務から第 9 回委員会の議事内容について報告があり、審議決定事項の確認が行われた。また、第 9 回委員会以降の経過について報告が行われた。

3. 議事内容

3.1 円山川の現状説明(河川管理者からの補足説明)

3.2 意見交換(フリーディスカッション)

3.3 その他

4. 審議内容および決定事項

4.1 円山川の現状説明(河川管理者からの補足説明)

第 9 回委員会の円山川の現状説明時に受けた「平常時の水位・水深の変化」「円山川に生息するトンボ」「魚類調査結果」「洪水時に問題となりそうな橋梁」等の質問に対して、河川管理者より補足説明が行われ、議論が交わされた。主な意見・質問は以下の通りである。

主な意見・質問

- ・水位低下の原因の一つとして、上流からの土砂供給量の減少の可能性があるとのことだが、上流区間で砂利採取が行われ、それが直轄管理区間の河床低下を引き起こしたと考えられる場所はないか。(藤田委員長)
過去に上流の上小田(兵庫県管理区間)で砂利採取が行われていた。また、直轄管理区間内でも行われていた。採取量の把握はできていないが、ひょっとしたら影響があるかもしれない。(河川管理者)
- ・河床は概ね安定しているのに、城崎等で水位が 15cm 低下している。この原因は何か。(服部委員)
この水位低下の原因は、現在のところ、特定できていない。円山川河口の津居山港に兵庫県の検潮所があるので、そのデータを用いて調べてみる。(河川管理者)
- ・立野地点でも昭和 48 年頃から水位低下が起こっている。圃場整備が行われ始めた頃となるが、圃場整備により流出形態が変化し、これが水位に対して影響があった可能性はないか。(平井委員)
このあたりの圃場整備が行われ始めたのが大正 10 年頃で、特に六方地区の圃場整備は昭和 55 年から平成 7 年にかけて行われた。初期の整備については単なる区画整理であり、昭和 50 年代以降の整備は乾田化等を含めた土地改良事業だったと思う。後者に関しては、水位低下に関して影響を与えた可能性はあると思う。(河川管理者・藤田委員長)
- ・昭和 55、6 年頃から棚田や山田が使われなくなったが、平常時の水位低下の問題と関連しないか。また、大々的に山の伐採をした後は草地に近い状況になる。草地は予想外に保水力があるが、十数年経つと保水力が極端に落ちる。この現象と平常時の水位低下に関わりがあるかどうかについて、調査データ等があれば提示して欲しい。(前田委員)
- ・出石川の場合、土地利用の変化による流出形態はほとんど変わっていないとのことだが、植林が完全に放棄されて木が大きくなっていることから、蒸発散量が非常に増え、河川に流出する水量は減っているはずである。30年か、50年前の植生図と現在の植生図をあわせて、単位面積当たりの蒸発散量を計算するとその水量の変化はつかめるのではないか。(服部委員)
的確な植生変化を示すデータがあるかどうか難しい面もあるが、いろんな意味で検討に必要な資料となるだろう。(藤田委員長)

4.2 意見交換(フリーディスカッション)

第 9 回委員会の審議決定事項に基づき、委員から円山川への想いや考えている課題等について自由な形

式の意見交換が行われ、円山川のあるべき姿、望ましい姿に関する意見や河川整備計画に向けた今後の議論の進め方(委員会の進め方)に関して意見が出された。主な意見は以下の通りである。

主な意見・質問

円山川のあるべき姿に関して

- ・コンクリートや人工物がどんどん増えてきた。かつては、特に下流の右岸側にゆったりとした川の流れとその川の流れとマッチしたような形でヨシ原や半湿地のような田んぼがあり、コウノトリが餌をついばめるような環境がそのまま残っていた。(前田委員)
- ・伊勢湾台風の時、小学校1年生だったが、夜暗い中、地域の人と一緒にトラックの荷台に乗って豊岡の町の方へ避難したのを鮮明に覚えている。また、同じ頃、地域の人が子どものために草刈りをして、プールの代わりに円山川で泳いだという想いもある。豊かな自然環境を維持することと基本的な安全を守るということを調和させることを考えるのがこの委員会のなすべきことと考えている。(上田委員)
- ・安全性が保たれながら、環境に配慮した治水のあり方、つまり安全な川で豊かな川であるべきという想いを持っている。従来、浸水域として人が住みにくかった地域にも都市開発が進んでいる。その人々がその土地の安全性について情報を持っているのだろうか。そういう意味での河川に関する情報を十分に周知していくということが大事だと思っている。また、円山川の過去の治水や利水の手法を整理しておくことは重要であると思うし、河口域の豊かな流れは、景観のポイントになると思う。(畑委員)
- ・自然や川をどのように利用するかという文化などと治水について、どこで線を引くかという議論にならざるを得ないと思う。下流域の戸島あたりでは、川に來日岳が鏡のように映る。このようなシンボルになりうる光景は大事にしたい。そういう想いとそれを守ることで洪水が起きたらどうするという議論になる。(池田委員)
- ・人口の密集している豊岡周辺(立野)については、堤防もあって計画高水位まで余裕はあると言われるが、直轄管理区間にも少量の雨量で被害をこうむる地区もたくさんある。その点を認識しつつ、自然を残しながら、安心・安全に暮らせる円山川にと思う。(江尻委員)
- ・自然環境を守るといふことと人間の社会環境を守っていく。その両立をさせていく中で、まず社会環境を守っていく上において自然環境を損なわない状況を模索していくのが、川に向かっての人間の責務だろうと考える。そのような考えの中でこれだけの水位が生じた場合、円山川はどうなるのか。昭和34年の伊勢湾台風が再来したらどうなるのか。といった点に関して情報が欲しい。(安森委員)
- ・私達のやるべきことは、「治水」と「環境を守る」の2点をバランスよく考えていくことだと思う。まず、環境を守るという点で言えば、素晴らしいものを次々提起していく必要がある。また、本当に町民の生活を守る観点(治水)を大事にしなが、あわせて自然環境を守っていくことが必要であると思う。(梶本委員)
- ・円山川の姿を考えると、豊岡盆地に向かって、上流域、本川、あるいは支川から水が集中してくる。そのような場所なので、低い所は常に災害に悩まされてきたし、どのように安全性を高めていくかということとはなかなか難しい一面はあると思う。(藤田委員長)
- ・人があんまり川にいない、川に人が近づかないというのを感じる。物理的には非常に近いが、社会的・心理的には川が遠いというか、遠い川になってきているのではという気がする。(菊地委員)
- ・「資料を出してください。」と言いながら、伊勢湾台風の状況などの資料を見ると、「このような被害を出さないためには」という方向に引っ張られているような気がする。地域の人達の被害という点は、次々にバトンされていくが、その地域の人達が生活する中で、本当にさわやかで、温かみのあるものは、予想外にバトンされていない。この点を委員会の中で考えてみる必要があるのではと思う。実は、自然の豊かさなどを強調する人達というのは、ほとんど人工物の中にいる人達で、比較的身近に自然環境が豊かであるような地域の人達は、そのありがたさは感じ取りにくい。特に、但馬地域というのは、兵庫県の中でも特別な環境にある。これを兵庫県として当たり前のもっていか、それとも但馬の置かれている特別な状況を逆に生かす方向で考えていくのかが一つの山場であると思う。(前田委員)
- ・昔と違い、学校にはプールがある。「子どもの遊べるような円山川を」という意見も出ているが、いろんなものが川に捨てられ、流れている川で子どもを泳がせると言う親はいないと思う。どのようにしたら住民が親しめる川になるのかということを考えてみる必要があると思う。(松田委員)
- ・最近魚が確実に減ってきた。人工的でも良いので、川に浅瀬を造り、魚がもっとたくさん増えるようにしていただきたいと思う。(加藤委員)
- ・計画高水流量を見直し、それ以上の洪水が来た時には、「これはもう我慢しなさい。」「破堤するのを前提にした防災対策をとりなさい。」とするのか、基本高水流量を現在のままとし、それに見合った流量となるように上中流域の森林や農地も含めた改修等を行う方向とするのか。それを考えた上で、洪水の量に応じたシミュレーションを積んでいき、妥協点を想定した上で、防災対策を立てたり、環境保全との折り合いを具体的につけていくこととなると思う。(有本委員)

今後の議論の進め方

- ・通常言われる被災という中には、住民生活の困ったことというのは反映されていない。そういうことを表すことができる方法はないか、また指標にしていくことができないか。他の流域委員会など、何かを守る、何か計画を立てる時に一番困っているのはそういうことではないか。(池田委員)
 - ・治水と環境という大きなテーマのもとで、今後どのようにして委員会を進められるのかということについて不安がある。安全ということを重視しているが、その他にも円山川に関する良いところもあると思う。その融合性について考えていきたいと思う。(木之瀬委員)
 - ・河川と人とのつながりの面で、治水の問題があり、利水の問題があって、生活に河川を使ってきた。その一方で、河川というのは自然物であり、それぞれの生物はその場所を使って生きてきていた。そのような構図、姿となっている。このようなテーマを適当に立てながら勉強会、意見交換会などを進めていくのはどうか。(藤田委員長)
 - ・この円山川流域委員会で今後の円山川のビジョンをつくることを考えた場合、地域になじんだ計画をつくっていくということが重要と思う。それには、ここで川と接しながら暮らしてきた人たちの知恵、感性が何らかの基準にならないかと思う。そのようなものを探る作業を行っていくことによって、その後、20年、30年の円山川のあるべき姿が出てくるのではないかと思う。(菊地委員)
 - ・実際、地域の人達が本当にどう思っているかは、なかなかわからない。言いたいけども出てこないものをどうやってその地域の中から引き出すかということも、一つ何か手法として考えてもいいのではないか。治水重視の環境配慮抜きなどの極端な例を示して、住民の方が日常では全く意識しないような想いを意識化させる手法を行っても良いのかと思う。(池田委員)
 - ・流域全体の保水力を高めるという治水の方法の可能性、また、私達が日常生活の中でどこまで洪水と妥協ができるか、洪水をかわす生活がどれくらいできるかについて議論したいと思う。(上田委員)
 - ・治水上の問題点はたくさんあり、この治水を完全に防御しないと人の生活に直接悪影響を及ぼすこととなる。治水をまず第一義的に考えて、その時にいろいろと問題が出てくる環境、景観、生物など環境に引っ掛かる部分が検討事項になると思う。(垣田委員)
 - ・環境、自然問題というのは、当然の第一義的な命題である。今の段階でこれらの個々の方法論を論ずるのではなく、当然の目標として今後の改修計画、改修方針を進めていく。そういう前提で河川管理者の方で、今後の円山川の改修方針、計画を叩き台として提示していただきたい。その後、個々に環境、自然問題を取り上げていくという進め方をしていただきたい。(山口委員)
 - ・本委員会は、国交省が円山川の改修計画を立案していく上において、その前提となる意見を流域の皆さん方から聞き、それを参考にして計画を立てていくという会議だと認識している。よって、国交省から出された計画というのはほぼ本決まりのものと思われるので、それを提示いただいた上で、意見を言うということは無理ではないか。川や自分の地域の環境を重んじるというのは、全国どこの人々も同じであり、それをいかに治水、利水等を絡み合わせていくところに難しさがあると思う。恐らく、国交省も計画を作成していく上において、その辺の意見・想いを求めていると思うので、我々はその辺の要望をもっと出していく必要があると思う。(安森委員)
 - ・複数の問題に対する妥協点を探さなければいけない。しかし、その妥協点というのが単純に治水と環境配慮のすり合わせによる妥協点で良いのかという思いはある。この妥協点を探す方法(制約条件など)を委員会の中で議論すべきである。(池田委員)
- 意見交換及びそれに関する議論の結果、今後の議論の進め方(委員会の進め方)について、以下に示す方針が了承された。

- ・これまでの委員会等で出された委員の円山川に関する想い、意見を委員長が集約し、今後議論を行なっていくテーマを導き出す。
- ・勉強会等を含めたテーマに関する議論の進め方(案)を作成し、事前に委員に示した上で、次回委員会で具体的な進め方を審議する。

4.3 その他

次回の委員会の日程

- ・第11回委員会は、8月下旬から9月上旬頃開催することとする。

一般傍聴者からの意見・質問

- ・旧円山川の環境が大きく変わってきている(カエルが減り、外国から移入されたカメが増えている)。
- ・円山川は他の河川に比べて、完成堤防の整備率が低い。完成堤防は市民の願いであり、どうすれば災害から町を守ることができるのか十分に議論していただきたい。
- ・昭和34年の伊勢湾台風の際には、KTRの円山川橋梁の線路の高さ程度まで水が来ていたと思う。この橋梁は非常に強固に造ってあると聞いたことがある。出水の勢いによってこの橋梁が流れるのが先なのか、両側の堤防が壊れるのが先なのか。橋桁が流されるのか、堤防が壊れるのかについては、きちんとした検討を行わないと結果は出てこないと思う。(藤田委員長)
- ・KTR円山川橋梁設置点の右岸堤防が危険であると思う。この堤防を強固なものに改修して欲しい。